

## 7. 杉野屋の女性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4984">http://hdl.handle.net/2297/4984</a>

## 7. 杉野屋の女性

牧野美保

- I. はじめに
- II. 女性と暮らし
- III. 女性組織とその活動
- IV. 考察：女性の暮らしと意識に変化をもたらしたもの

### I. はじめに

「杉野屋の女性はなまくらもの（怠け者）」、「杉野屋から嫁はもらってはいけないが、娘を嫁にやるなら杉野屋にしろ」と言われていたほど、集落内外を問わず、杉野屋の女性はあまり仕事をしなくてもよく、嫁に行けば楽ができるという印象を持たれていたらしい。しかし、杉野屋における聞き取りを通して、私が杉野屋の女性から受けた印象は、「なまくらもの」よりも、本当によく働く「働き者」というものであった。また、世代を問わず、明るく、活発な女性という印象も受けた。しかし、その活発だと印象を受けた女性たちの参加する組織の1つである、婦人会および女性部が2002年の3月に解散したことに驚いた。なぜ解散したのか、解散に至るまでの経緯を知りたいと思い聞き取りを進めていくうちに、杉野屋の女性たちの生活の変化が、彼女たちの婦人会および女性部に対する意識に影響を与え、変化をもたらしたのではないかと考えるようになった。

この章の目的は、1950年代から2002年までの杉野屋の女性の生活の変遷を検証することである。ここで扱う女性は既婚女性と限定し、彼女たちの仕事や家庭内での生活、杉野屋における女性の組織活動など、いくつかの視点からそれらの変遷を分析し、何が彼女たちの生活に変化をもたらしたのか、知ることである。

### II. 女性と暮らし

杉野屋の女性が「なまくらもの」、「嫁にやるなら杉野屋」というイメージが集落内外に持たれていたのは、1960年代、杉野屋の農家1軒あたりの農地は、隣の集落の菅原に比べると狭く、

朝から晩まで農作業をしなくてよかったからであるらしい。しかし、1940年代に杉野屋に嫁いできた女性の話では、杉野屋の多くの女性は集落内にある紡績工場で働いていたようだ。2交代制で働き、工場の仕事のないときは、農作業を行い、家事をこなしていた。同じ工場に勤める女性同士は仲がよく、田植えの際に共同で作業をする女性のエイ（結い）のグループは、同じ工場に働くもの同士が中心となって、グループを作ることも多かった。しかし、1960年前後から農業の機械化が進み、農作業が比較的楽になったことで、エイ（結い）の制度はなくなり、農業にかかる時間も短縮されていった。さらに、1990年のバブル崩壊後、女性たちが勤めていた杉野屋の紡績工場はすべてなくなり、その勤め先は変化し多様化している。男性だけでなく、女性も自分用の自動車を持つようになり、志雄町内、羽咋市、鹿島町などに勤めに通っている。正社員や契約社員、パートタイムなど、子供の年齢や、自分が勤めに出ている間、子供の面倒を祖父母が見てくれるか否かなど、家庭の都合に合わせて、勤務形態を選択しているようだ。

外に勤めに出るようになったのは女性だけではない。1960年代以降、杉野屋の専業農家は減少し、兼業農家においても恒常的勤務を行う人のいる農家は増加した。それにより、農業による収入に家計を頼っていた家庭は、農業以外からの収入を得るようになった。収入源が複数になることによって、世帯形態に変化がもたらされた。収入源が1つである場合は、2世代、3世代同居で家族全員が一緒に食事をしていたが、収入源が複数になると、住居は同じであるが、台所が別の世帯、さらには同じ敷地内に別棟に若い夫婦の住居を建てる、同一敷地内での複数世帯といったような世帯が出てきた。

世代間で台所が別の世帯や同一敷地内での複数世帯の場合、料理は毎日、別々に作ることが多いようだ。理由としては、嫁の勤めからの帰宅時間が不規則であるという生活時間の差の問題や、食事の好みによる食生活の違いが聞かれたが、勤めに出ている嫁の代わりに、孫たちの食事の用意を祖母がするケースを考えると、食生活の違いが主な理由と考えられる。子供が好むハンバーグやスパゲティなどの洋風の料理はお年寄りの口には合わず、反対に、祖母が作るような煮物などの料理は子供には喜ばれないという。台所が同じ家庭の場合、一家に既婚女性が2人いる家庭でも、嫁のほうが毎日の食事の用意をするという家庭もあり、理由としては子供が祖母の料理を食べないから、古臭い料理は好きではないからという声も聞かれた。洋風の料理が家庭の食事に紹介される以前は、嫁が働きに出ている家庭では、姑が家事を切り盛りし、家族の全員が同じ料理を食べていたが、現在は、近くのスーパーで、様々な食材も簡単に手に入り、料理の幅も広がっている。さらに、外食産業も発達するなか、若い世代の味覚の変化が起こり、家庭内にもそれがもたらされ、台所が別の家庭が存在するようになったと思われる。

最近では食事のための買い物は、羽咋市石野町に行く場合が多いようだ。自動車ですら約5分の石野町には、1999年前後からスーパーマーケットやドラッグ・ストア、レストランなど様々な

種類の大型商店が建ち、生活が便利になったという声が聞かれた。それ以前は、杉野屋の集落内に食料品店が数軒あり、魚売りなどの行商も回ってきたりしていたが、現在、それらはほぼなくなった。また、現在では子浦の商店街を利用することはあまりない。食事以外の衣類などの買い物は鹿島町、津幡町、金沢市などの大型ショッピング・センターを利用する場合もある。さらに、子供が望むので金沢市内中心部の特定の衣料品店へ行き、服を買い求めることもあるとの声も聞かれた。現在では、テレビ・コマーシャルや新聞の折り込み広告、雑誌広告などから情報を仕入れ、買い物に行くこともあるようだ。

家電製品の登場は、主婦の生活を大きく変化させた。第2次世界大戦前には、ラジオなどの家電製品を保有していたのは中流以上の家庭が中心であった。家電製品が本格的に普及したのは、1950年代後半からであった。電気洗濯機や白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気掃除機、電気釜が続いたが、杉野屋のある家庭では、まず1959年の当時の皇太子のご成婚を見るためにテレビを、次に洗濯機、掃除機、冷蔵庫、冷凍庫の順に購入したという。現在では電子レンジだけでなく、自動食器洗い機を使う家庭もある。プロパンガスは1970年前後に普及し、それまでマキのカマドを使って料理していたのが、ガスに取って代わった。「家電製品やプロパンガスの登場により家事にかかる時間は減り、楽になった」と、70歳代の女性は語ってくれた。

また自動車の導入が、女性だけではなく、杉野屋の人びとの暮らしに大きな変化をもたらしたのは明らかである。自動車の所有は男性の場合、1965年ごろから始まったが、1975年前後に集落で自動車を運転できる女性はほとんどいなかった。そのために女性の活動の範囲は男性に比べ狭かったが、現在では自家用車は1家に1台以上、多い場合は1家の成人の数だけ所有している。女性が自動車を持つことで、通勤圏が広まり、買い物に行くのが便利になり、さらには子供の塾や習い事の送り迎えをするのにも車は不可欠である。その一方で、北陸鉄道バス（子浦や敷浪経由高松との間に日に7本、金沢市との間に特急が日に1本）や、志雄町内を循環する町営の福祉バス（月木金曜日、日に数本）は本数が少なく不便であり、利用価値があまりなく、同居している子供や嫁、孫だけでなく、自家用車を持っていない人や年配の人は、他所に住む家族などの車で買い物に行く場合もあるようだ。

1950年代に杉野屋に嫁に来た女性は、姑との関係について、「姑が厳しく大変だった」と述べていた。また1960年代に嫁いで来た女性からは、「婦人会の活動は、厳しい姑から逃れられる唯一の時間であった」と聞かされた。その当時は、どこの家でも、姑は厳しいものであると認識されていたようだ。また、「姑が厳しかった」と述べた女性は、「自分が辛かった分、嫁には優しくしてあげようと思い、現在は嫁と仲良くやっている」とも語ってくれた。私が聞き取りに伺った家庭では、嫁姑の関係が極めて良好に思われる例は多かった。また、嫁姑の関係を尋ねたところ、「うまくやっている」や、「昔は嫁よりも姑が強かったが、今では姑よりも嫁が

強くなった」との答えが多く聞かれた。さらには「息子夫婦に家を出て行かれると困る」ので、嫁に遠慮している姑もいるようだ。

杉野屋では、戦前には男尊女卑の風習が厳しかったらしい。特に嫁に対する風当たりや、「出産費用は嫁の実家が持つ」、「獅子舞の修理費用は嫁の実家が当番制で支払う」など、経済的な決まりごとは多く、大変であったという。しかし、それらの風習は徐々になくなり、「現在では男尊女卑はなくなった」や「杉野屋だけではなく、一般的に今では女性のほうが強くなった」と述べる男性もいた。女性が強くなったという認識はされている一方で、イエの顔はやはり男性である。区の総会に出席するのはほぼ男性で、世帯が女性のみで構成されている場合のみ、女性が出席しているようだ。

3世代同居が一般的であった時代は、姑が家事を行い、嫁が勤めに出る場合、子供の面倒は主に家事を行う姑が見ていた。また、近所の人に子供を預けることもあったという。現在でも、3世代同居の場合、姑が子供の面倒を見ることがある。2世代同居の世帯では、勤めに出ずに子供の世話をする女性もいるが、保育所や実家の母親に子供を預け勤めに出る女性もいる。また、3世代同居でも嫁が働きに出ず、子供の面倒を見ることもあり、さらには家に子供の面倒を見る人がいる場合でも、保育所に預けることも多く、子供の面倒の見方も多様になってきている。

第2次世界大戦から戦後にかけて苦しい時代を経験した女性の多くは、「最近の親たちは、子供たちに好きなものを食べさせ、欲しいものを買ってやり、やりたいことをやらせており、親は子供に甘い」と述べている。経済的に豊かになり、親は子供の意向に沿うようになっている。また、その一方で、母親が勤めに出ているため、共働きの両親と子供のコミュニケーションが減っているのではないかと、との不安の声も聞かれた。

かつて他所から杉野屋に嫁いできた女性にとって、仲のよい友達ができる場は婦人会や班であった。1970年代ごろから冠婚葬祭の行事に業者が介入するようになる以前は、それらは在所のしきたりを知る場であり、同じ班の既婚女性たちは手伝いを行い、仲の良い友達を作る場もあったという。しかし、業者の介入によって、手伝いをあまり行わなくなった。葬式後の初七日にお講を行うが、その翌日、集落内の世話人の女性が、「オツリ」という、その費用を集めてまわっていたが、「今ではオツリすら集めない」と嘆く人もおり、その理由として、現在の集落内の人情の希薄さを挙げていた。

子供が保育所に通い出すと、そこで同じ年齢の子を持つ母親同士、仲良くなることもあり、子供が成長した後、度々会い食事に行くこともあるという。仲の良いもの同士、頼母子[たのもし]というグループを作っていた。井戸端会議の延長のようなもので、交代で宿(集まる場)をし、集って話をしたりした。またお金を集め、そのお金で賞品を買い、抽選を行ったり、貯

まったお金で温泉旅行に行くこともあった。頼母子は女性だけのものではなく、男性にも頼母子はあるが、お互いの頼母子について口は出してはいけない。また、外部の人たちにも、誰がどの頼母子のグループに入っているかは認識されている。30年程続いているグループもあるが、頼母子のメンバーが減り、活動が難しくなり、やめてしまったグループが多く、1970年代に結成されたグループが最も新しいものであるらしい。また、頼母子ではなくとも、年代を問わず、仲の良い女性たちはよく集まり、話をするとする。30歳代の女性は、会って話はしなくとも、電話やEメールなどで頻繁にやり取りをしているという。

### Ⅲ. 女性組織とその活動

1960年代に杉野屋に嫁に来た女性から、当時、杉野屋内の家庭では、1軒につき既婚女性1人、必ず婦人会の会員にならなければならなかったという話が聞かれた。参加はイエとしての義務で、嫁と姑と一緒に参加することはなく、姑から嫁へと受け継がれていくものであった。受け継ぎのタイミングは、姑の体力が衰え始めたころ、姑自身が決めるものであった。

婦人会および女性部の会費および部費は1軒当たり年間1000円で、会長が集めて回った。それ以外にも、郵便局の簡易保険や農協の貯金を希望者に対し行っていた。会員が多いときには、会費の剰余金は100万円を超えたこともあるという。簡易保険の集金の手数料や農協貯金の集金の報奨金は、旅行などの費用に回され利用された。

1960年代に杉野屋に嫁に来た女性たちは、1990年ごろまで、婦人会の活動は活発であったと述べている。特に、1960年代は、バレーボールを熱心に練習し、婦人会は楽しい集まりだったという。それ以外にも、綱引きや毎年春に行われていた「健康づくり」（体育大会のようなもの）などもあり、婦人会が参加や世話役をする行事も多かったらしい。夏には毎年8月14日に、婦人会が中心となって盆踊りが行われていた。そこでは仮装大会も行われ、婦人会のメンバーで毎年テーマを相談し、仮装をしていた。また、婦人会に参加していた人の多くの楽しみとして旅行が挙げられた。農閑期などに行われた旅行は、忙しい日常から解放される良い機会だった。

集落外から杉野屋に嫁に来た女性たちにとって、婦人会の集まりは集落のしきたりを知るためのよい機会であり、友達を作る場であった。また、旅行だけでなく、婦人会の活動自体が忙しい日常から抜け出せる楽しい時間であり、さらには厳しい姑から逃れられる息抜きの時間であると述べる人もいた。婦人会の活動が活発だった時代は、女性にとって一般に娯楽が少なかったため、婦人会の活動は既婚女性にとって、一種の娯楽であったと言ってよいだろう。

しかし、杉野屋の婦人会の会員は徐々に減少していった。1996年まで会員は約60名おり、志

雄町の連合婦人会に参加していた。しかし、会員が減ったために、連合婦人会から脱会し女性部に改称した。婦人会は文化祭など志雄町の行事の度に二口、菅原と合同で、それに参加する決められた人数を集めなくてはならず、そのために会長をはじめ役員は、参加者集めに苦労しなくてはならなかった。そのため、役員になるのをためらう人が脱会し、会員が減少していった。連合婦人会を脱会してから、集落の1軒1軒に、女性部に参加するよう呼びかけて回ったが、30数人しか集まらなかった。2002年には30人いた部員のうち、班の大部分の既婚女性13名が参加していた2班のメンバーがまとめて退部することが決まると、部員の数が少なくなり、活動自体が困難になったため、2002年3月の役員改選時に解散することを決定した。解散時には、部費の残金約20万円が御神輿の修復費用に当てられた。

集落の既婚女性たちは忙しく、役員になると仕事が大変だから、というのが、婦人会および女性部に入らない理由の一番に挙げられた。それ以外に、既婚女性が紡績工場で働いていた時代は、同じ工場で働く仲間同士、仲がよく連帯感があったが、最近は人情が薄くなった、という意見もあり、集落内の連帯感の希薄化が原因として挙げられた。また、職場や子供会の行事に参加するから、婦人会および女性部まで手が回らない、またそれらのほうが楽しいし旅行も一度でよい、という意見も聞かれた。この意見から、婦人会および女性部以外の集落内の活動や集落外での活動が増加し、娯楽が多様化していく中で、婦人会および女性部活動の魅力が減少していったと考えてよいだろう。

女性部が解散したために、集落内で女性に対する頼みごとをどこにすればよいのかはつきりしなくなった、という問題が起こっている。「区長の妻がしてはどうか」という意見もあるが、それでは、ただでさえ仕事が大変で、区長のなり手が無いのに、さらになり手がなくなるのでは、と懸念されている。他の意見としては、杉野屋の公民館（分館）活動で、趣味のサークルである民謡会の人に頼むという意見もあるが、毎回特定の人が仕事をするのは大変であるとして、合意は得られていない。この問題は、今後の課題であろう。

杉野屋には、動発ポンプを持つ婦人消防隊が存在する。婦人消防隊は、1982年8月に結成された。結成された理由については、「他の町で婦人消防隊が結成されたから杉野屋でも結成した」という話も聞かれたが、はつきりしたことはわからない。また、1965年前後に杉野屋に嫁に来た女性から、「当時、消防隊から法被が配られていたが、実質的な活動はなかった」という話も聞かれた。しかし、杉野屋には区（もしくは壮年団用）の動発ポンプや古いまといなどもポンプ置き場に置かれていたので、法被が区（壮年団）の消防隊から配られていた可能性もある。2002年11月に、杉野屋の婦人消防隊は、20年間、活動を続けてきたことを県の消防本部から表彰されたこともあり、結成は1982年と考えてよいだろう。

以前は、婦人会および女性部の役員が、婦人消防隊員を兼ねていたが、現在の隊員は、各班

から1人選出されており、その役は持ち回り制である。隊長はその中から選出する。隊員には特別に区費から保険がかけられてはいるが、活動費などの予算はない。

主な活動は、毎月1回、動発ポンプのエンジンを掛ける練習を行うことである。隊員が2人1組になり、1人1回、計2回行う。練習を行っているところを見たが、エンジンを掛けるには力とコツが必要であり、年配の女性には難しいようであった。その他の活動には、春に放水、消火器訓練があり、2002年は5月12日に、志雄町の消防署から署員を招いて行った。また、隊員は羽咋市役所における消防隊の訓練や、志雄町の消防署の訓練を見学した。さらに、北部保育所において、9月の運動会の際に、動発ポンプを引き、保育所の庭を一周するパレードを行った。保育所の園児が幼年消防隊員であるためであり、志雄町の消防所長からの話があったという。それ以外には、救命講習会などもあり、2002年11月に集会所で救命措置の講習会と防火の研修会を行った。夜番（火の用心の見回り）は婦人消防隊の仕事ではなく、当番制で每晚、班内で行っている。

「婦人消防隊も婦人部と同じく、そのうち消滅してしまうのは？」と疑問を持つ人もいる。現在に至るまで、婦人消防隊は実際の消火活動を行ったことはない。また、隊員が毎年交代することで、動発ポンプのエンジン掛けを習得するのは難しく、実際の火災の際に迅速に消火にあたれるか、疑問の余地が残る。しかし、料理や暖房など、日常生活は火と切っても切れない密接な関係があり、いつ火災が起こるかはわからない。そのため、婦人消防隊の存在は無視できないだろう。また、現在の隊長は、「放水や消火、避難訓練には隊員だけでなく、杉野屋地区の住民が参加して欲しい」と述べている。集落内の安全のためにも、婦人消防隊の存在は不可欠であり、住民が興味を持つような企画を行うべきではないかとの意見も聞かれた。

杉野屋の女性部は解散してしまったが、志雄町の老人クラブである長和会に参加している杉野屋の高齢者には、女性の割合が高く、活動に積極的に参加しているようだ。彼女たちは婦人会に参加していた際には、活発に活動していた人たちであったという。長和会の活動には、天満宮の清掃や旅行、ゲートボールなどがある。それ以外にも、毎月2回「生き生き教室」がある。25人から30人が参加しており、毎回同じメンバーで、大部分が女性である。男性の参加者も増えてはきているが、高齢の女性たちにとって、生き生き教室は、おしゃべりが楽しみな社交場であるといっていよう。



#### IV. 考察：女性の暮らしと意識に変化をもたらしたもの

女性が農業以外の職業を持つことにより、独立した収入を得ることによって、家族内での地位は変わったといえるだろう。専業農家では、収入源が農業しかなく、舅ないし夫が家計の実権を握っていた。そのため、女性は自分で自由にできるお金がなく、それによって行動を制限され、家庭内での地位も低かっただろう。しかし、女性が働くことで、家計に直接貢献し、自分で自由になるお金を持つことで、女性は家庭内での地位を向上させ、活発に行動することができるようになった。嫁姑関係、夫や舅との関係にも影響を与え、姑の嫁に対する優位、男性の女性に対する優位というような従来の図式では家庭内の人間関係を語るができなくなった。しかし、それらの関係が逆転したとは、必ずしも言えない。個人の性格や家庭のあり方によって、女性の家庭内での立場は異なる。また、今日でも女性は、家庭外ではイエの顔である男性を立てるなど、状況によって自分の立場を判断し行動している。

職業が農業から勤めが変わることで、より安定した収入を得ることができ、また女性が働くことによって収入がさらに増え、自動車や家電製品など耐久消費財を購入できるようになった。家電製品の登場によって、女性は忙しい家事から解放されたと感じるようになり、活動的になった。また、女性が自分で自動車を運転し、仕事や買物に行くようになり、活動範囲が広がったのは間違いないだろう。

活動範囲の広がりには、自動車の影響だけではない。ラジオやテレビ、雑誌などのマス・メディアの普及により、魚売りなどの行商や集落の人たちの話から情報を得ていた時代とは違い、簡単に多くの情報を得ることができるようになった。折り込みチラシによるスーパーなどの特売の情報や、各地のイベント情報など、簡単に手に入れることができるようになった。それにより、女性たちは買物に行く店をきめ、子供を連れて遊びに出かけることができるようになった。

また、娯楽自体も多様化している。婦人会の活動が活発であった時代、女性は毎日集落内で過ごし、集落外に出ることもあまりなかった。そのため、婦人会の活動が唯一の息抜きであったのだろう。しかし、現在では、女性は個人の自動車を持ち、ある程度の経済的、時間的余裕があれば、自分でどこでも好きな場所に行くことができ、なんでも好きなことができる。さらには、実家や集落外の友達にも頻繁に会え、集落内に仲の良い友達が居なくても、それほど困らない状況である。そのため、婦人会および女性部の魅力やメリットが乏しくなり、入る必要もなくなったのではないだろうか。

また、テレビなどの家庭内での娯楽だけでなく、映画やボウリング、大型ショッピング・センターでのショッピングなどといった、外出型の娯楽も増えた。それらの場が金沢などにある場合でも、自動車があれば気軽に行くことができる。実際に、30歳代の女性や小、中学生の子

供を持つ女性は、子供を連れて行くこともあり、「杉野屋は金沢にも七尾や鹿島町に行くにも便利でいいところである」との意見も聞かれた。また、子供にせがまれ、東京ディズニーランドや志摩スペイン村など、県外にも出かけるという。このことから、娯楽が多様化しているだけでなく、それを楽しむに不可欠なアクセス手段や、経済的な余裕を持っていると考えてよいであろう。

このように、杉野屋の女性の生活はただ単に変化しているというよりはむしろ、生活を取り巻く環境にあわせて多様化していると言って良いだろう。女性たちは多様化した環境の中で、自分に合ったものを選択し、生活している。婦人会および女性部の存在は、その変化の中で、女性たちの望むものとは合わなくなってしまい、メンバーが減少してしまったのではないかと思われる。30歳代の女性に、また婦人会および女性部ができたなら参加するかどうか質問したところ、「日常から解放されるような時間を過ごせるのなら、参加しても良い」と答えが返ってきた。日常から解放されたいという願いは同じでも、どのようなことによって解放されたと感じるかは変わってきているのである。家庭内や杉野屋内で多くの時間を過ごしてきた女性と、活動範囲が広がり、自分のやりたいことができるようになった女性との間に開放感のありかたの違いが出てくるのは当然である。このような違いは、婦人会および女性部に対する意識だけでなく、彼女たちの生活のあらゆることにおいて言えるのではないかと思われる。